を認むるを得、[83] 然れども蒙古時代以前に於ては、第二篇に於て述べたるが如く、トルコ語を以て記せる文記、若しくは回教徒史家の間に於ても、Uiγur は名さへも現はるゝこと甚だ少く、吐魯番より出でたる所謂回鶻文字を以て記せる古代トルコ語譯の彌勒下昇經の跋にも、[84] 其の經が印度の語よりトカラの語に譯され、トカラ語よりトルコの語。(türk tili) に譯されたるものなることを記して、回鶻卽ち Uiγur 語なる名稱を記さず、[85] Le Coq 氏の旣に述べたるが如く、後世に出でたる回鶻字の版本に於て、初めて uiγur tili 卽ち回鶻語の名が現はるゝなれば、此の文字に對して特に始より回鶻文字といふ名稱の附せられたるものとは思はれず、されば此の名稱は回鶻人が之を創製し、創使したるが爲に生じたるものには非ずして、蒙古の崛起時代に於て、畏吾兒卽ち唐代に回鶻と稱したる部族の使用せる文字なりしが爲に、而して又文化の程度極めて低かりし蒙古人が、此の字を受けて使用するに至りしより、恐らくは蒙古人によりて斯く名附けられ、以て今日に至りしものに外ならざるべし、かゝれば所謂古き回鶻文字にして書ける文記、卽ち輓近吐魯番・喀喇和綽・龜茲等天山南路の諸方より發見せらるゝ多くの回鶻文字の文記も、何等回鶻人の間に行はれたるものなるを表明するものには非ず、又其の古き回鶻語＝卽ち上述の文記に用ゐられたる言語＝と云ふものも、實は唐代に於て廣く漠北地方より天山地方に亙りて行はれたるトルコ語の文語にして、此の廣き地域の間に於ては、其の口語に於てこそ、地方又は部族によりて方言上の相違が存したりとするも、文語に於ては何等かゝる差違ある無く、オルホン碑文に見ゆる突厥語と、新疆地方より出づる文記に見ゆる所謂古き回鶻語と稱せらるゝものゝ間に於てすら、特徵として數ふ可き言語上の相違は殆んどなく、只だ其の間に於る時代の新古によりて、音韻上に轉訛の現象の存することが著しき相違の點と認めらるゝのみ、然も尙之を回鶻語と稱して怪